私は正直な所、卒業したくありません。

今日私達のためにたくさんの方々がお集まりくださっている中、こう始めに伝えていいのかすごく悩みました。けれどこうした最後をしめくくる貴重な場だからこそ今、私が読まなければならないのは、高校三年生が感じる正直で偽りのない言葉なのではないでしょうか。だから私にしか言えないありのままの石神井高校での三年間を伝えようと思います。

　春、桜。今思えば始まりもこの体育館でした。人見知りの私は周りの人が怖くて、椅子に座ってじっと下を向いていました。すると「おはよう、よろしく！」と明るい笑顔がふってきたのを覚えています。私はその笑顔が眩しくて、嬉しくて、この学校がすぐに好きになりました。

　高校一年生として過ごす学校はすべてが新鮮で刺激的でした。石神井高校は自由な校風です。同時に全て自分でやるという責任を伴います。最初はとまどいもありましたが、この学校なら成長できるのではと期待も感じていました。文化祭がインフルエンザの影響で中止となった事もありました。先輩の引退の場所が無くなってしまう、そんな行き場の無い思いを学校や先生にぶつけた事もありました。でもそんな思いをくみ取ってたくさんの方が動いてくださってできた校内発表会。私達は本当に感謝しています。

高校二年生。嫌がっていたクラス替えだったはずなのに、数か月もすればまた大好きなクラスになっていました。二度目の体育祭。初めて経験する応援団。あんなに辛かった七日間はありませんでしたが、確かに私を強くしてくれた時間だったと思います。本番。死ぬ気で走って戦って、大声で叫んで応援して、最後はもう声は出ませんでした。でも気持ちで伝わる応援があることを知りました。終った時に感じた、あの言葉にはできない気持ちは体験した人にしか味わえないものだったと思います。雨で天候は最悪だった修学旅行。散々文句は言いましたが、ホテルもバスも冷たい風が吹いた観光地だって皆と居ればすごく楽しかったです。実際に目の当たりにした戦争体験。みんなの辛そうな顔をよく覚えています。大切な人の命が簡単に失われていく、それが当たり前だった数十年前。今ある平和という幸せを当たり前にしてはいけないと強く思いました。

　高校三年生。すべてが最後になっていく喪失感。何をするにも「これが最後なんだね」と友達とよく言い合っていました。伝統を繋ぐ重みを知る事になった最後の体育祭。最後の遠足。最後の夏休み。最後の部活。部活は部長として頑張った大切な場所でした。けれど、私は部長には向いていませんでした。上に立つという事は、ただ一人で頑張る事ではありません。人を動かし、責任を取る事です。そう先生に何度も言われたけれど、私にはできませんでした。八十人を超える部員の上にたつということは、相当な重圧でした。でもどんなに辛くても一人でやってやるとどこかで意地を張っていました。きっとみんなはそんな私に気付いていたのだと思います。だからいつだって話を聞いてくれて、一緒に泣いてくれて、力になれなくてごめんと言ってくれました。うまく人を動かせないのは私なのに、そんな言葉をかけてくれた仲間。「そんなみんなのために頑張ろう」。誰かのために頑張る事がこんなにも自分の力になるのだと、初めて知りました。部長になれたことは私に色々な事を教えてくれました。

受験期に入り、徐々に次の場所へと押し出されていく気がしました。少しずつ減っていく登校日、友達としゃべって帰る帰り道や、自分のロッカーが無くなってしまうこと、私はどこか受け入れられない自分がいました。

それは今も同じです。卒業したくない。できるならずっとここにいたい。そう思うのに、私はどこかそんな弱気な自分を隠さなくてはいけないと思っていました。

でも石神井高校が教えてくれたことは

「自分はまだまだだ」ということです。

色々な人に支えられ、暖かい環境があったからこそ三年間が幸せに過ごせて、そしてここに立っていられる。どんなに大人ぶっても、一人でやろうと思っても結局、誰かに助けてもらっている。それに気付けた事、自分がまだまだだと思えた事がここでの一番の財産だったと思います。まだまだだからこそ周りに感謝ができる、まだまだだからこそこれから進んで成長する事が出来る。

私はここで立派な大人にはなれませんでした。でもこの三年間で自分を知ることができました。まだまだ子供で周りの人に支えられている私。そんな私を隠さず、受け入れ、私はここから大人になっていきます。

そしてお母さん、見ていますか。

私が悩んだ時も辛い時もいつだってそばにいて、応援してくれたお母さんを誰より尊敬しています。私はお母さんみたいな大人になれるよう頑張ります。いつもありがとう。

　また家族だけでなく、いつも私達の事を考えて下さった先生方、毎日毎日校舎を綺麗にしてくださる主事さん、地域の方々、そしてこうして卒業式ができることにも感謝しなければなりません。去年の三月十一日、東日本大震災がおきました。一年前はこうして卒業式が行えるかどうかも危ぶまれていたし、また被災地ではいまだに被害や悲しみの傷は癒えないままです。こうして安心して卒業式が行えることを当たり前にしないことが私達にできる第一歩かもしれません。長くなりましたが最後に明るい日本の発展とさらなる母校の発展、そしてご出席の皆さまのご健康を祈念して、答辞とさせていただきます。

平成二十四年三月十日

卒業生代表